

## モリエールの実生活と劇作

—彼の女性関係をめぐって—

片山正樹

「太陽王」ルイ十四世（一六三八—一七一五）の治下に花咲いたフランス古典主義文学は、まさに文化史上の偉観であるといえましょう。なかでも、モリエール（一六二二—一六七三）の劇作は、永遠にかわらぬ人間性を適確にとらえている点で、同時代の悲劇詩人やモラリストの作品以上に現代人の共感をよぶ傑作ぞろいであります。

モリエールの作品の幅の広さと真実味は、彼の人間的な体験の深さから出たものであることは周知のことです。彼の「体験」は、彼の作品に種々のかたちであらわれていますが、貴族階級・宗教勢力・医師・同業者などとの敵対関係についてはここで触れず、彼の女性関係についての体験がどのように彼の劇作に生きているかを、読み物ふうに要約するとともに、彼の実生活に関する実証研究の一端を紹介いたします。

一六四三年、二十一才のとき、のちのモリエールことジャン・バチスト・ポクランは、父親にむかって、家業をつぎたくないから王室御用家具商の職をだれか他の兄弟に廻してほしいと頼みこみました。このとき彼は劇作家になら

うとは考えておらず、俳優になりたいと思つていたのです。彼が父親の大きな反対にあいながらもこの固い決心をするに至つたのは、祖父が芝居好きであつたことと、この頃よく芝居をみる機会があつた結果にちがひなく、最初の愛人、女優マドレーヌ・ベジャールを見たのは、その前年、ルイ十三世がモンフランに来ていたとき、ド・ロアン夫人邸で御上演があつたおりのことではないかとされています。一説には、パリでのことだつたともいわれていますが、いずれにせよ、モリエールはマドレーヌを見るなり恋をするようになりました。彼は一流の学校で立派な教育を受けた法学士ですが、彼の教養も家柄も、彼の芝居好みの熱情と、それにも増して一人の賢くてきれいな女優の美しい眼に勝つことができなかつたのです。しかし、数年としようえで、かなりの過去をもつた女優と出合つたという運命は、二十一才の青年の名を王様づき家具商人としておわらせずに、大作家として永久に残す結果となりました。

マドレーヌの出は決して名家でも資産家でもなかつたのですが、一六四三年の六月三十日にモリエールその他十人で「イリュストラテッド盛名劇団」を設立するまでに、ベジャール一座で若いときから重要な女優として活躍していました。このベジャール一座は、一流のものではなかつたにせよ、彼女は当時マレーの町で悲劇女優として活躍し、十八才のときに二千リーヴルも収入があり、トリニに庭付きの家を買うほどでありました。

さて、髪は茶色で色じろで、頭がよくて綺麗な娘、と伝えられているこのマドレーヌが、いつモリエールとの関係にはいつたかという問題ですが、それは一六四三年パリに於てのことか、あるいは、さきに述べたモンフラン一六四二年のことか？ このただの一年の差に過ぎないことが思ひのほか重要なのであります。つまり、後年のモリエールが四才で結婚した娘、アルマンド・ベジャールは、マドレーヌの妹か娘かということを明らかにするものなのです。モリエールの死後、やもめとなつたアルマンドに対して放たれた最も残酷な悪口は、彼女を「夫の孤児で、父の後家」と呼

ぶことであつたというほど、これには深刻なぞが秘められております。ラクールは、三つの仮定を挙げたりして、その著書の第五章四十頁のほとんどを費し、ジュール・ルメートルやアベル・ルフランなどの学者の説を紹介しておりますが、この問題はモリエールが結婚するところで取上げることになります。

さて、モリエールとマドレーヌの関係ですが、モリス・ドネによりますと、劇団を結成したときすでに、「マドレーヌはもはやジャン・バチスト・ポ克蘭に拒むものはなにもなかった」ということですが、一方、ラモン・フェルナンデスは、彼らの関係の始まつた時期ははっきりしていないと言います。しかし一座ができたころにはもう親密になつていたには違いなく、フェルナンデスによると、彼らは急速に深間にはいり、賢くて抜目のない女優はモリエールに金儲けさせるように努力したということがあります。当時マドレーヌはモデーヌ伯爵というひとの囲い者であつたにもかかわらず、「精神的でしかも性的な友情が成立した、モリエールは多情な男であり、マドレーヌは放縦な体質であつた」ので二人のあいだは発展して行きました。

しかし「盛名劇団」もあまり思わしくなく、遂に一六四五年の夏、つまりモリエールが劇団に入つて三年目には、もはやパリで上演することができなくなり、地方巡業、すなわち都落ちで、そのご十四年間、モリエールはパリに帰れなかつたのであります。彼がようやくパリに帰ることができたのは一六五八年で、その年の暮にプチブルボンにおいて「ヘラクリウス」「ロドギーヌ」「シンナ」「ル・シッド」「ポンペ」などの悲劇を上演しました。その結果マドレーヌの悲劇女優としての才能が中央でみとめられるようになったことは、当時有名であつたコンスタンタンというひとが、詩を作つて「彼女には欠点はある、しかもなお私に落涙せしめるだけの魅力がある」と述べたことによつても、ほぼ想像することができます。彼女の友人たちも、へつらいでなしに、「貴女はこの王国の天使であり、類を見ぬその才智は……」と賞讃したこともわかつております。

さて地方巡業の十四年のあいだにド・ラ・ブリ嬢、ラ・デュ・パルク嬢、そして、幼名ムヌーこと、のちのアルマンド嬢が次々と登場したわけで、ラクルのいうように、一六四九年、モリエールの二十七才ごろから、「ドサまわり芝居のごたごたのなかで、モリエールの演じた、真のコメディ、現実のドラマがうかがわれる」ことになるのであります。

この現実の喜劇悲劇とはどのようなものであったでしょうか。最初に問題とさるべきものは、いったいモリエールのマドレーヌに対する気持がいつごろから冷えたのかということですが、しかし、いつ如何にしてマドレーヌが彼に裏切られたのを知ったのか、彼女の嫉妬あるいは自尊心がそれについて何か反応を示したかどうか、復讐したかどうか、などについては現在なにごとも明らかにしていないようです。ラクルも、彼女の失敗について「マドレーヌほど美しく、賢く、才能のある女が、なぜ男の愛情をつなぎとめ得なかったかは不思議だ」といっていますが、しかし、一部の研究者がいろいろとセンサクするのをたしなめて、「一番よいのは、何も結論をだそうとせぬことで、マドレーヌのライバルを調べるほうがまだしも役に立つだろう」と述べております。

ラクルの忠告にしたがうまえに、この間の事情や、のちのアルマンド・ベジャールのことを知るのに都合のいい書物「名女優物語」をここで紹介いたします。

モリエールが死んで十五年のちの一六八八年に、作者不明の「名女優物語、または、モリエールのかつての妻、やもめのラ・ゲランの物語」という小冊子がフランクフルトで出版されました。（筆者が手にしたのは、一八七〇年のパリ版。援用書目表参照。）その「出版者より読者へ」という前書きには、「小生はこの物語の作者も知らず、これを小生に渡した手も存せぬ……」という書きだしで、「この町を通りがかつたある飛脚が小生の店で数冊の本を買い、そのついでに、この原稿を小生にみせ、確かなものと申すので、これを公けにする義務を感じたがゆえに……」と自分

の感想をのべ、「小生に手渡されたときそのまま、加筆も省略もなしにお見せする次第。お気晴らしになればさいわい。頓首。」となんとなく取り澄した調子で結んでおります。ラクールは、この覆面作者について、「この小冊子は女の匂いがする。女性特有の強烈で鋭敏な憎しみの匂いが。おそらく文士の手だすけをえた女優の手になるものであろう」と考え、さらに、このラ・ゲランという女がアルマンドそのひとであるかどうかについて疑問をさしはさんでおります。いうまでもなく、この本は学問的な研究書でもなく、正確な記述を目的とする伝記でもなく、そのなかに委しく書かれたモリエールの家庭悲劇には事実の誤りが多く、全面的には信用できないものですが、それにしても、フェルナンデス、ドネ、またラクールなどの研究書がかなり引用していることから考えて、当時を知る唯一の資料としての価値はあるといえます。特に、二十才も年下の妻アルマンドに対するモリエールの苦悩を描いた箇所は、なかなか真実味がこもっております。

さて、結婚するまでのモリエールは三人の女優と只ならぬ仲になっていたわけですが、身から出た錆とはいえ、これら三人の統御にはさすがのモリエールも手を焼いたようです。彼の友人にシャペルという詩人がいますが、彼はモリエールあての詩をまじえた手紙のなかで、「実際のところ、偉大な男よ、きみは彼女たちを統率するためには全頭脳を使わなくてはならぬ。ぼくは、いまのきみをトロイの戦いにおけるジュピターに比べたくなるよ。この比較は無茶ではないだろう。ジュピターが三柱の女神を上手にあやつって、天上の混乱をせき止めたあの故智を思いだして、よく味って欲しいものだ……」と述べていますが、その三人の女神を一口にいえば、マドレーヌはいわゆる、しっかり者、ド・ラ・ブリはおとなしい女、そしてラ・デュ・パルクはおきやんであります。マドレーヌ以外の二人について少し説明をしましょう。一六五〇年、モリエールが三十才に近いころ、カトリーヌ・ルクレルという女優、すなわちラ・ド・ブリが、ナルボンヌにおける上演でその存在をあらわしました。このことは「名女優物語」を読みます

と、一六五三年のこととなっておりますが、三年ほどおくらせていますが、そのころはずでモリエールはリヨンで素晴らしい女優ラ・デュ・パルクに気を惹かれていたはずですから、やはり一六五〇年が正しいようです。ラ・ド・ブリにはもちろんド・ブリという夫がありましたが、どうも頼りない男だったらしく、俳優としても、モリエールが辞めさせられたといわれているほどの大根役者で、そのうえ、妻とモリエールとの関係を知ってもどうにもできないような男でした。しかし一説には、ラ・ド・ブリ（結婚まえはカトリーヌ）が先にモリエールの愛人になっており、その関係をマドレーヌにかくすために、命じられた結婚をしたのだともいわれております。しかし、とにかく初めのうちはマドレーヌに気付かれなかつたようですが、まもなくラ・デュ・パルクがあらわれるに至って事はなかなか面倒になりました。このころの年代考証は非常に複雑ですから省略しますが、ラ・デュ・パルクはラ・ド・ブリに二三年おくられて登場したと考えて差支えありません。

ここで、このように次々と女性関係を増していくモリエールの心情について考えてみましょう。「名女優物語」のなかの、モリエールの告白によれば、「愛情に対して飽くことなき気質に生れ」と彼が愛に飢えていたことを知ることができますし、また、彼の母親が若死にしたことを連想して、「モリエールは女性の愛情に飢えていた」と結論を出したくもなりますが、しかしあるモリエール研究家は、彼に對しての母親の影響ということは考えられないとも言っております。要するに、彼が「惚れやすく、色好みだった」ことは事実であり、そのことは彼の作品にも示されています。ラクールは、「彼の作品のなかには、精神的あるいは肉体的な誘惑への弱さに対する寛大さが、表現は押えられているにしても、あふれている……彼は真実を求めあまり、また自分の性情の傾向にしたがうあまり、その作品のある部分において露骨な語句を大胆に用いすぎたと認めざるをえない」と非難の調子で述べております。一方、ブリュヌチエールの文学史によりますと、これは大ざっぱな引用ですが、「モリエールはどんなことでも自然

(本性)に従う行動であれば、たとえそれがふしだらであらうと放蕩であらうと、あえて反対はしなかった。人間の野心に対しても彼は非常に寛大であった。彼から見れば、これらの悪は本能に結びついてナチュラルに合体するものだからである。これに反して、いわゆる才女たちや、軽薄な貴族や、卑しい根性を信仰の仮面で掩おうとする連中は、彼にとって學生の敵であり、哄笑をもつて報いるべき相手であった」と、モリエールの不身持をさえ弁護しております。

一般に、俳優の女性関係をあまり問題にするのはむしろ野暮として、どこの国でも、まずは大目にみる慣わしになつておりますが、それにしても、モリエールの女性関係は少し手が込みすぎていたようです。

モリエールをめぐる四人の女のなかで、最も地味な性質であったラ・ド・ブリと彼との関係は、モリエールがアルマンド、すなわち「若いほうのベジャール」に熱心になるころまで続いたことは確かとされており、その後いつ別れたかは不明ですが、その間に浮気なモリエールはラ・デュ・パルクに目を移し、見事失敗してまたラ・ド・ブリのもとに帰った事実もあるようです。(このあたりのいきさつはモリス・ドネの評伝に委しく述べられております。)しかし一六五八年ごろラ・ド・ブリは自らモリエールの愛が冷えたことを悟りました。モリエールは常に彼女に対して、「多大の敬意」を示していたそうで、彼がアルマンド・ベジャールと正式に結婚する決心をした一六六一年の二年まえ、一六五九年には、ラ・ド・ブリはモリエールに「父性のきつな二つ目」を与えたことですから、彼らのあいだには二人の子供があったと想像することができます。

モリエールが、ラ・ド・ブリからアルマンドに心を移したことについて、最初の女、マドレーヌが彼をラ・ド・ブリから引離すためにアルマンドをそのかしたのだという説があるのですが、マドレーヌとアルマンドとの関係が、母娘か姉妹かということが明らかにされておらず、そのいずれに仮定するかによって、事情が全然ことなるものだと

思われますので、さきに述べた、マドレーヌが女性関係のことでモリエールに干渉したかどうかという問題に関係のあることでしたが、わざと触れずにおきました。

ラ・ド・ブリとの関係が始まって間もない一六五〇年ごろ、モリエールは、「第二のヘレナ」とまで讃えられた美人女優ラ・デュ・パルクに思いを寄せたのですが、きっぱりはねつけられました、彼女はデュ・パルクと結婚するまでは、テレーズ・ド・ゴルラといって、外科のヤブ医の娘でした。ラ・デュ・パルクは、その美貌によって、モリエール、コルネイユ（一六〇六一一六八四）、ラシーヌ（一六三九一一六九九）という十七世紀の三大文豪に愛される名誉をもったわけですが、最初モリエールに近づかれたときには、結婚したばかりの朗らかな八方美人であった彼女は、よく彼女を笑わせる子供じみた夫を愛していて、モリエールを問題にしませんでした。彼女の夫グロ・ルネのおもかげは、「恋の恨み」の登場人物グロ・ルネにあらわれております。ラ・デュ・パルクという女は、少し足りないのではなくかといわれるほどの冗談好きなおきやんだったそうですが当代随一の美女であったことは事実で、さきに述べた三大劇作家のほか、ラ・フォンテーヌ（一六二二一一六九五）や、弟トーマ・コルネイユ（一六二五一一七〇九）などの有名な人たちも、彼女のファンでありました。彼らはきそってラ・デュ・パルクに詩をおくったらしく、女という女はことごとく好きだったというラ・フォンテーヌの半ばからかったような詩も残っておりますし、また、大（兄）<sup>グラン</sup>コルネイユが、ルアンにいた彼女におくった詩のひとつに、「わが面、いささか老いを示すとも、わが齡、<sup>よわい</sup>ふさわしわらずと思し召さるや」というのもあり、当時五十二才のコルネイユ、——ラクールにいわせると、年老いたノルマンディのライオンが——三十も年下の女の罪作りなコケツトリに悩まされたらしいことがうかがわれます。

この、夫の生存中は貞淑な妻であつたらしいラ・デュ・パルクが、そのむかし気まずくしりぞけたモリエールに対して、いつごろ愛をゆるすようになったかという点、はっきりしたことは無論わかりませんが、しかし、数年後の一



六六八年に彼女が死ぬまで、二人のあいだは決して平穩無事だったのではなく、ラシーヌが割り込んできたりして、(彼はこの女優の争奪戦がもとでモリエールと仲違いをしたのですが) そのあげくには、彼女の死の原因についてラシーヌが告発されるという事件もありました。ここでは、彼女の墓にはエレジーが雨と降りそそいだこと、その墓碑銘は「ここに美しきヘレナねむる、ここに第二のヘレナねむる」であったことを記憶にとどめ、最後の女性アルマンドに移ることにいたしましょう。

一六六二年、四十才、不惑を迎えたモリエールはアルマンド・ベジャールと結婚しました。

一六六一年の春、アルマンドは十七八の若々しい乙女でした。彼女のおもかげは、モリエールによつて「成上り貴族」のリュシルという人物に示されており、それをまとめたドネの記述によりますと、彼女は「優雅で、その年にふさわしいやせ型であつたが、情熱を湧かせるアングルと、電気を放つポイントをそなえていた。美人というのではなく、それ以下だが、目は小さいながら表情に富み、口は大きかつたが、こまやかな肉感を約束するていの受け口であり……」とにかく、典型的な美女ではないものの非常に魅力的な娘だったらしく、当時のジャーナリストであるロビネというひとが、「ああ、すばらしき魅力、だれか彼女を愛さざる」という賞讃の詩を残しております。彼女は歌や踊りがじょうずで、観客の魂をうばつたそうであり、またその軽快で清楚な服装はそのころのファッションを決定したというほどの才智と趣味をもっていました。

アルマンドは一六五三年、十才のときリヨンで、「アンドロメード」の子役として出演したのち、ずっとモリエール一座とともに生長しつつ、モリエールにもよくなつておりました。良き友人となるべき彼らでありましたのに、アルマンドが年頃となるに従つてモリエールの愛情が変化化したものと思われれます。彼は決して最初から彼女を将来の妻と考えていたわけではなく、彼らの愛情が男女のそれに移つていったことについて、ドネは次のようにモリエールを

弁護しております。「……彼は引込思案でいるにはあまりにも好好きであつたが、若い娘に背信行爲をするにはあまりにも紳士でもあつた。ただ、ある日、ちよつとした恥らいが、ひとことが、まなざしが、握手したことが、相手から愛されていることを彼に気づかせたのだ。もはや友人としてでなく、恋人として愛されていることを……」

さて、マドレーヌの恋人であつたモリエールを愛するにあたって、アルマンドはどのようにその問題を考へていたかという疑問が浮びますが、ドネによりますと、彼女は結婚後にそのことを知つたということもありうると思つていきます。この意見は、アルマンドの利害さから想像すると少し無理のように思われるのですが、そういう意見が正しいとすれば、結婚後アルマンドがモリエールを相手にしなくなつた事情も充分に説明がつくこととなります。

一体、アルマンドはマドレーヌの娘だつたかどうか。これにはいろいろの研究がありますが、「はつきりしたことは何もわかつていない」という平凡な結論しかないようなので、ここでは、ラモン・フェルナンデスの著作によつて、その考証過程を述べようと思ひます。(かくいう筆者は、モリエールを専攻してもおりませず、まして彼の結婚問題に探求心をもちつづけているわけでもないのです、この雑文をかくのに用いたものより新しい研究書に注意しております。もしもアルマンドの出生について、拙稿より進んだ研究が出てゐることを御存知の方はどうぞお教えねがいます。)

簡単に申せば、一八二一年までは漠然と、つまり伝説的に、アルマンドはマドレーヌの私生子であつたと信じられていましたが、その年にベフアラというひとが新しい見解を発表しました。それによりますと、アルマンドは、ジョゼフ・ベジャールに嫁いだマリ・エルヴェ(すなわちマドレーヌの母親)の娘であるといふのです。この見解はモリエールの結婚式のときの資料にもとづくものらしく、マドレーヌとアルマンドは姉妹なりとする説です。さらに、その四十二年後、一八六三年にウッドール・スーリエというひとが発表したところによりますと、一六四三年(この年

はアルマンドの生れた年、あるいはその前年にあたりますが)に、ジョゼフ・ベジャールとマリ・エルヴェとのあいだには、「また洗礼を受けぬ幼児」が生れていたという事で、このことはアルマンドの洗礼についての資料が不明瞭であることと考え合わせると、「姉妹説」の一翼をになうものになります。これに反して、「母娘説」の基盤は、伝説のほかに、二人の女の年令差が二十五・六もあることを根拠に、マドレーヌは母親のマリが生んだことにして、こっそり女兒を生んだのだという想像であります。そこまでうがった考えをすれば、もう水掛論のようなもので、結局のところ現在では、モリエール自身がそれについて全く沈黙していること(これは悪くも取れますが)と、特にモリエールを悪くみる必要がないことで、彼がそんな不倫なことをしたのではないと考えられております。しかし当時としては、モリエールの多く敵たちがこのことを見逃すはずがなく、たとえば、モリエールの根城であったパレ・ロワイヤル座と対立する大劇場オテル・ド・ブルゴーニュの悲劇役者モンフルーリは、かねての恨みを晴らそうと、(モリエールは「ヴェルサイユ即興」という一幕物で悲劇作者に毒舌をふるったことがあるのです)モリエールを破倫の人なりとルイ十四世に訴えました。しかし強大かつ賢明なルイ大王はそれを聴許することなく、ことは立消えとなったのですが、この「太陽王」を無二の楯として抱きこむ機略がモリエールに欠けていたなら、多くの敵の攻撃を受けていた彼は即座に失脚したにちがひありません。絶対王政下において国王の庇護を受けるありがたみは想像を絶するものであり、モリエールが背教者・自由主義者として当時の支配階級から憎悪されていたことを考えると、数多い彼の傑作を愛好する現在のわれわれは、ルイ十四世という専制君主に感謝せざるをえないわけです。

さて、四十才のモリエールは、二十才にもならぬ少女と結婚すると同時に、妻のややもすれば軽はずみとなる行動について、はげしい苦惱とたえまのない嫉妬におそわれるのでした。結婚して半年あまりで書いた「女房学校」にあらわれるアルノルフの悩みは原作者の悩みそのままであると考えていいようです。これに反対して、半年ぐらいでは

モリエールは幸福を味いこそすれ、まだまだアルノルフのような嫉妬に苦しむはずがないと断言する批評家もいるようですが、辰野隆博士は、結婚の前年にモリエールが書いた「亭主学校」にもすでにその徴候が察せられることからして、彼の嫉妬は結婚ののちに生じたものでなく、また彼の恋はアルマンドがまだ十五六才であった時分からきざしていたと思う、と述べておられます。

要するに、モリエールにとってアルマンドは掌中の珠であり、愛着がはげしいとそれだけ疑惑の念もはげしいわけでした。「女房学校」に登場するアルノルフは、結婚はしたいがコキユになりにたくないという四十二才の男です。彼は金持なので、コキユになることを極度におそれるあまり、田舎でかわい四つの子を見つけて、「よし、この子を育てて妻にしよう」と、母親から譲りうけ、修道院で彼の主義のもとに養育します。そして彼女が十七才になったとき自分の家に引取りますが、やはり最初の夢をすてず、下女二人を彼女アニエスの身边に侍らして警戒しています。しかし、ある日アニエスはバルコニーから若い男を見かけ、結局アルノルフの心組みは水泡に帰すという結末ですが、なぜモリエールはこんな劇を書いたのでしょうか。ついにアニエスと結婚する望みのたえたときのアルノルフの絶望は、単なる喜劇の一節としてはあまりに悲劇的であると思われまゝ。彼はまったく惑乱して、ひたすらアニエスにその決心をひるがえさせようと搔きぐどくのです。

(低い声で、傍白で) 俺の煩惱には際限がないのか! / (正白で) 俺の情愛は、結局、何ものにも比べられないのだ。／何か証拠を見せて呉れというのか、恩知らず奴、／俺の泣くのが見たいのか、自分で自分を擲<sup>なげ</sup>つて見ろと言うのか。／俺の横鬢<sup>よこびん</sup>を俺の手でむしり去<sup>と</sup>つて見ろというのか、／俺に自殺して見ろというのか、お望みなら自殺もしよう。／俺の情愛の証<sup>あかし</sup>が立つ事なら、何でもやって見せよう。(辰野隆博士訳)

このせりふにモリエールの現実の苦しみを感じないのはむしろ不自然だと考えられます。コキユになりたくないとい

いうアルノルフの願いは、たしかにモリエールのそれに違はなく、幼いときから一人の娘を大切に育てあげて……という考えも作者の夢だったのではないだろうか。そしてまた、不幸なモリエールは、そのような企てが無意味であることをよく知っていたでしょうし、すでに青春を失った自分を充分意識して、際限なきばんのうに煩悶していたのでしよう。四十男の若い妻に対する愛には、恋慕と嫉妬と疑惑と憤怒と絶望とが渦巻いていました。あらゆる男性を誘うに足る若き妻の言動、特にその不義不貞のうわさがモリエールの耳にもはいつてくるようになっては、女優としての妻の名声がはなやかであるだけに、夫としての不安と疑惑がつのって、それが激しい嫉妬となります。しかも一層わるいことには、不貞の証拠がなにひとつないことで、そのためモリエールはたえず疑心暗鬼にさいなまれながら、哀れな夫となり下って行くのでした。

このモリエールの苦しみは、さきに紹介しました「名女優物語」の一節によくあらわされております。親友シャペルの慰めに対してモリエールが自分の気持を告白するくだりですが、その部分を昭和九年に辰野隆博士が名文章で紹介しておられます。「仏蘭西文学」下巻、二八一頁以下参照）ここでは、特に関心をまつ方のために、十七世紀の語法で書かれた稀本テキストの一節を原文のまゝ引用しておきます。

…Comme elle estoit encore fort jeune quand je l'espousay, je ne m'apegeus pas de ses meschantes inclinations, et je me creus un peu moins malheureux que la plupart de ceux qui prennent de pareils engagements; aussy, le mariage ne rallentit point mes empressements, mais je luy trouvoy, dans la suite, tant d'indifference que je commençay à m'appercevoir que toutes mes precautions avoient esté inutiles et que ce qu'elle sentoit pour moy estoit bien estloigné de ce que j'aurois souhaité pour estre heureux. Je me fis à moy-mesme des reproches sur une delicatesse qui me sembloit ridicule dans un mary, et j'attribuy à son humeur ce qui estoit un effet de tendresse pour moy……

... Je pris, dès lors, résolution de vivre avec elle comme un honneste homme qui a une femme coquette et qui en est bien persuadé, quoiqu'on puisse dire que sa meschante conduite ne doit point contribuer à luy oster sa reputation. Mais j'eus le chagrin de voir qu'une personne sans grande beauté, qui doit le peu d'esprit qu'on luy trouve à l'education que je luy ay donnée, détruisoit en un instant toute ma philosophie, sa presence me fit oublier mes resolutions, et les premieres parolles qu'elle me dit pour sa deffense, me laisserent si convaincu que mes soupçons estoient mal fondez que je luy demanday pardon d'avoir esté si credule. Mes bontez ne l'ont point changée. Je me suis donc déterminé à vivre avec elle, comme si elle n'estoit pas ma femme.....

モリエールは、舞台のうえでは（彼は死ぬまで作者兼俳優であり、一六七三年二月十七日に、病気をかくして上った舞台上で倒れ、五十三才でこの世を去りました）、王侯貴人から町人の末まですべてのひとを笑わせながら、家に戻っては嫉妬の苦盃を飲みつづけた不幸な夫でありました。その苦惱は、やがては「人間ざらい」（一六六六）のアルセストの怒りとなり、遂には「ジョルジュ・ダンダン」（二六六八）の絶望的な自己嫌悪とまでなったのであります。

アルセスト（モリエール演）という人物は、正義派であり、社会に満ちみちた虚偽をにくみ、齒に衣きんぎょさせぬ理想家であります。しかし彼には弱点がひとつあり、それはセリメヌ（アルマンド演）という若く美しい未亡人に恋をしていゝことで、しかも彼女は、彼の最も憎む欠点をすべてそなえておられます。才ばしつて、はでで、誠意がなく、軽薄な貴族たちにとりまかれるのを喜び、心にもない愛嬌をまきちらす女でした。このような女を愛することに矛盾を感じながらも、アルセストは愛さずにはおれず、はげしい嫉妬に悩まされます。結局、彼女を愛するのは彼ひとりということが明らかになり、アルセストが、この汚れた社会から遠く去って二人きりで暮そうと申出ると、セリメヌは急に自分の若さが惜しくなり、「はたち代の女には孤独はあんまり恐ろしくつて。」と答えるので、最後の希望を失ったアルセストは彼女を捨てて孤独に暮す決心をするというのが結末であります。「いや、こうなつてはばくは貴女

を憎む。その拒絶だけでこれまでのひどい仕打ち以上のものだ……(略)……断然、こちらからお断りだ。この明白な侮辱こそが、貴女の憎むべき束縛からこのぼくを永久に解放してくれるのだ。」

この言葉は、モリエールが自分の妻に対して、「もし侮辱をつづけるのなら離縁する勇氣があるぞ」、と決心のほどを示したものと受取ることができません。しかし、そういう裏面を憶測するならば、さらに、このセリメーヌを演じるアルマンドに、あまり烈しい後悔をさせないように、また気嫌をそこねたり、反抗させたりしないように、モリエールは気をくばっていたとも考えられます。つまり、「明白な侮辱から解放される」決心をしたアルセストは、絶望的に「精神的孤独」のなかに生きるのであって、決して、セリメーヌの従妹のエリアント(ラ・ド・ブリ演)の愛を受け入れるのではない(エリアントは結局アルセストの友人フィラントと結ばれる)わけで、ここにモリエールの空(から)いばりと弱気とが示されていると考えるのは無理でしょうか。実生活と作品とをこれほどまでに一致(?)させていたモリエールが、レオンカヴァルロ(一八五八—一九一九)の有名な歌劇「道化師」(現実の嫉妬に狂った座長が、芝居の最中に、相手役を演じる妻を刺殺してしまうという筋。一八九二年初演。)のような惨劇を引き起さなかったのは偶然のことに過ぎなかったのではないかとまで、筆者は夢想してしまっているのであります。

つぎに、「ジョルジュ・ダンダン」(二六六八)においては、結婚後六年のモリエールのうめき声がより一層はげしく深刻になっております。

いなかの金持ダンダンには、彼にはもったいないほど美しく素晴らしい貧乏貴族の娘アンジェリックと結婚しました。しかしその妻は、「クリタンドルという若い子爵の恋文を受取り、密会を承諾するという尻軽でじだらくな女」でした。哀れなダンダンには妻の不貞を知るのですが、そのたびにさかねじを受けます。まず、妻の両親から、妻の恋人に謝罪させられ、次に、自分の粗忽から妻にむちで打たれ、おしまいは膝まづいて妻に許しを乞うという三幕

喜劇であります。(この芝居は、当時の最も盛大な祝典の余興として、ルイ十四世ほか三千数百人の観衆の面前で、モリエール夫妻が演じたのです。これほど痛烈な自己嘲罵がありましたでしょうか。)

「あわれなジョルジュ・ダンダン」が妻に対してその不貞をとがめると、アンジェリックは、「でも結婚するまえに、あなた、貞節でいて親切にするようにってあたしにお頼みになったかしら？」などと答え、夫を尻目に勝手なことをします。夫は、「ジョルジュ・ダンダンよ、ジョルジュ・ダンダンよ、おまえはこの世で一番の馬鹿なことをしでかしたぞ。もう自分の家がおそろしくなった。なにか苦しみを見つげずに家へ帰れたためしがない……」と悲しみ、最後に妻にあやまらせられたあげく、自己嫌悪と絶望とで、「ああ、もう諦めた、処置なした。わしのように意地わる女と結婚した男がとるべき最上の方法は、水のなかに飛込みにいくことだ、頭からドボンとな。(幕)」と、自殺のほか手段がないと思うほどに自分の腑甲斐なさを歎くのでした。

このジョルジュ・ダンダンの最後のせりふは、そのままモリエールの告白ではなかったでしょう。モリエールは何度もダンダンに扮し、(それは一番の当り役だったそうですが)アンジェリックをアルマンドに演じさせ、(おそろしく飛び切りの名演技だったでしょう)観客を大笑いさせながら、舞台のうえで密かに泣いていたに違いありません。この、モリエールの、あまりに人間的な苦しみは、彼が好色であったとか、女性の愛に飢えていたとかいう問題を超越して、われわれの胸に「人間の弱さ」という一つの真実を深刻に感じさせずにはいないのであります。むかし、彼が劇中の一人物にいわせた、「これが人間だ、ああ、これが人間だ、まったく、これが人間だ、というせりふと、フェルナンデスのいった「人間は単純なものではない。そして、モリエールはとりわけ、単純な人間ではなかった。」との評言が思いあわされるのであります。



(付・年令早見表)

モリエール	(一六二二—一六七三)	モリエールが四十才のときは
マドレーヌ	(一六一八—一六七二)	四十四才
ラ・ド・ブリ	(一六二〇—一七〇六)	四十二才
ラ・デュ・パルク	(一六三二〔四?〕—一六六八)	三十〔二十八〕才
アルマンド	(一六四三〔四?〕—一七〇〇)	十八〔十九〕才

OUVRAGES CONSULTÉS (援用書目)

- 1) Léopold Lacour : Les maîtresses et la femme de Molière, tome I, Les maîtresses. (Paris, Editions d'art et littérature, 1914.)
  - 2) Maurice Donnay : Molière. (Paris, Arthème Fayard, 1926.)
  - 3) Ramon Fernandez : La vie de Molière. (Paris, Gallimard, 1929.)
  - 4) \* \* \* : La fameuse comédienne ou l'histoire de La Guérin, auparavant femme et veuve de Molière. (Paris, Barraud, 1870, «rééd. de l'Édition en 1688, Francfort, Rottenberg.»)
  - 5) Molière : Œuvres complètes, tome 2. (Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade» 1951.)
  - 6) 辰野隆：仏蘭西文学『下巻(モリエール私観)』(東京、白水社、1946.)
- 脱稿後に左記の書物を読む機会を得たが、本論のテーマに関して特に新しい展開はなかった。
- 1) Georges Mongrédien : La vie privée de Molière. (Paris, Hachette, 1950.)
  - 2) Léon Thoorens : La vie passionnée de Molière. (Paris, Intercontinentale du livre, 1958.)

—— 関西学院大学文学部専任講師 ——